

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

新しい時代の到来という高揚感や期待感が令和という新元号の発表で日本を包み込んだ。それからあと言いつ間に師走。本年も台

風などの自然災害で甚大な被害が各地を襲った。歌手の水前寺清子さんの「三百六十五歩のマーチ」、一日一歩、三日で三歩、三歩進んで二歩下がる」困難な道でも、諦めず進めば展望は必ず開けると信じていた。来年は東京2020オリンピック・パラリンピック開催の年だ。長野冬季オリンピックを迎える大晦日に、白馬ジャンプ競技場で98白馬実行委員会が開催したドコモスペシャル・カウントダウンin白馬は、日本に・世界に「白馬」を強烈にアピールしたい、との願いからだった。

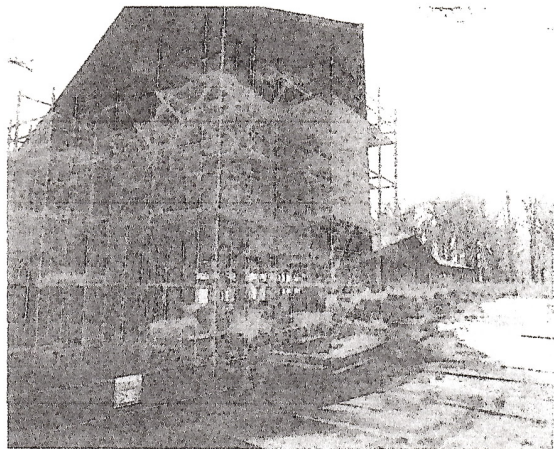
企画会議を積み重ねドコモに企画提案、開催経費の協賛をいただき「チューリップコンサート」での賑わいの中に、オリンピックに期待する大観衆を用意、NHKの「ゆく年くる年」から「白馬」を情報発信できた喜びは格別だった。「ゆく年くる年」は毎年、神社仏閣からの中継が主だが、民間企業がスポンサーしているイベントの中継は、本当に稀で、放映後に、白馬関係者の携帯が鳴りやまなかったことは、その後の白馬の国際化への

の取り組みの一助になったと信じていた。1964年の東京五輪の際にもパラリンピックが開催されたが記憶にない、との声があるのも事実だ。11月に5日間の日程で行われ、第一部として障害のある

の取り組みの一助にえて行く。パラスリームの挑戦は、私達に諦めないことの大事さを伝えるに違いない。時が客観的な時間の流れとは別に、主観的な時間の進み方があると感ずるようになってきている。同じ一時間でも、楽しい時はあっという間だが、苦しい時はやたら長く感じる。自分がうまれてきた時間もそれなりに長いような気がするが、宇宙の歩みからしては、ほんの一瞬。来年は、改めて「まだまだ若い」と自分を見つめ直そう。元日に令和で

長野オリンピックで培った財産を生かす機会を大切に

も、楽しい時はあっという間だが、苦しい



国際リゾートに向けて施設整備が地域随所で進行している

初めての年賀状を楽しみにしている人は多い。郵便・新聞を始め多くの人達の元日早朝に配達業務する関係者に「お早うございます」・「おめでとございます」・「お疲れさま」

の言葉を掛け合う大切さをぜひ実行してほしい。その積み重ねが、自分を前向きに変える一歩になると違いない。
(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)